

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子
〜気鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画

20世紀歌人群像

2 伊藤左千夫

加藤治郎

間もなく21世紀。
近代短歌から現代短歌へ…
短歌はこの100年でどのような足跡を残してきたのだろうか。
24人の歌人にスポットをあてて20世紀の短歌を検証する。



第一章

人と時代

伊藤左千夫は、包容力の歌人である。すべてを大らかに受け入れ、自らの文学に包み入れた。正岡子規のような革命家ではない。継承者である。しかし、子規にはなかった実に豊かなものを持っていた。家庭があった。社会があった。恋があった。宗教があった。土の匂いがあった。

真詩人は一切万有の趣味を解し殊に深く人間を解して居るものである、されば事務的に直接の仕事は出来なくとも、如何なる種類の職業者に対しても、有力なる相談相手になるだけの資格がなければ詩人とは云へない、寧ろ詩人となれない、田夫野人の相手となつても、商人職工の相手になつても、彼等に満足を与ふだけの工風を持つて居らねば詩人ではない、又一朝にして一國主権者の顧問になるとも文を評し詩を評すると、少しも変りなく其顧問に應ずることが出来るやうでなければ真詩人ではない。

明治四十年「日本」掲載の「筭竹桃書屋談(二四)」より。左千夫四十三歳の隨筆である。この文章は、左千夫らしい多少エキセントリックなところがあるにしろ、彼の到達した詩人観といつてよい。

「真詩人は一切万有の趣味を解し殊に深く人間を解して居るもの」まではよいとして、田夫野人・商人職工の相談相手、一國主権者の顧問というところまで行き着くのは、二〇世紀末のわれわれから見れば、異様としか言いようがない。しかし、どうだろう。左千夫の生きた時代、とりわけ彼の実質的な文学活動期間であった明治三十三年(一九〇〇年、子規入門)から、大正二年(一九一三年、没)



生家（現・千葉県成東町）

という二〇世紀初頭は、まだ詩歌に世界を丸ごと呑み込むような度量のあった時代ではなかったのか。急いで補足すれば、歌人が小説を書くことなど、わざわざ言うまでもない当たり前のことだったに違いない。

詩歌と社会と政治の混沌とした垣根のない時代。例えば、明治二十八年、正岡子規の日清戦争従軍。日本という「国家」の「国民」であることを実感したことが、子規を昂揚させた。例えば、明治二十八年から繰り返された与謝野鉄幹の渡韓。親露派の閔妃殺害事件への関与の疑いで日本へ強制送還というくだりには、ヒロイックなドラマを感じないではいけない。左千夫は、こういう政治意識の流れを汲んだおそろく最後の世代であった。

政治と短歌ということであれば、二〇世紀のどの場面にもその問題は露出している。プロレタリア短歌、安保闘争と短歌等々、幾つも挙げる事ができよう。しかし、この左千夫の生きた二〇世紀初頭のそれとはニュアンスが違う。それは何だろう。主体の問題だろうか。個人は、ある時点から、集団というフィルターを通してしか政治に関われなくなったのではないだろうか。いくら一人称で歌おうとも、それは無名の個人の立場を表明するに過ぎなかった。安保闘争もそうである。政治に対する民衆という図式であった。子

規や鉄幹のようなヒロイズムはなかった。ヒーローになるのは、死者だけであった。

左千夫の時代は違う。政治は、まぎれなく一個人の志であった。

志の彼方に、詩歌も政治も等しく輝いていた。左千夫が元老院に富国強兵を主旨とする「建白書」を送ったのは、明治十四年、十六歳の時である。「楽道家たちは、そのような時代人としての体質で、前をのみ見つめながらあるく。のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朶の白い雲がかがやいているとすれば、そのみをつめて坂をのぼってゆくであろう」（司馬遼太郎『坂の上の雲』第一部あとがき）——こういう時代の天真爛漫な楽天性を左千夫は共有していた。

左千夫がそういう時代の楽天性を消失して、晩年の（急死だったが）沈鬱な世界を形成していったのが、明治四十四年から四十五年にかけての斎藤茂吉・島木赤彦とのアララギ内部論争以降であったことは、実に興味深い。まさに明治から大正への移行期。発端は「木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちにけり」という茂吉の歌の作品評だった。左千夫は、初二句が「感情をいひ現はした自然の言葉でないから言語に何等のひびきがない」と批判。赤彦は「事件をその儘に捉へて、形体の描写を明瞭にしようと勉めたのは（すでに）過去の仕事である。我々は今己に物や事柄から進んで、その上に味はれるシミジミした情緒の影を追いつつあるのである」と応酬した。論争は続き、個々には錯綜した議論があったが、俯瞰すれば、これは明治の精神と大正の精神の闘争にほかならない。楽天性で明治の精神を語るのが余りに雑駁であるならば、気質とか体質と言ひ換えた方がよいだろう。一方、茂吉・赤彦たちの気質を一言で語る言葉がないので、仮に苦悩と言っておこうか。この論争の言葉を使

えば「自然の言葉」と「情緒の影」の対立ということになる。茂吉の「常に接近談話して居る同人中にあつて甚だしく意見の相違があるのは、最早議論などすべき以外にあるのではあるまいか、全人格（肉体及精神）の相違から来るのではあるまいか」という痛烈な左千夫批判は、暴言ではなく、意外とこの論争の本質を突いていたといえる。

茂吉・赤彦には、それぞれ医学や教育というバックボーンはあったが、彼らの歌に現実の世界を丸呑みするような器量はない、と思う。世界はもつと抽象化され、観念の産物となった。観念は、樂天的ではあり得ない。苦悩と隣り合わせである。まして茂吉たちに詩歌と政治が等しく輝く志であるような世界観はなかつた。左千夫は、大正の氣質に打ち砕かれ、孤立していったのである。

左千夫の生い立ちと時代背景を簡単に整理しておく。

元治元年（一八六四）、上総国武射郡（今の千葉県）に生まれる。

明治十四年（一八八一）、政界を志し、明治法律学校に入る。眼病のため修学を断念し、帰郷。

明治十八年（一八八五）、再度上京、豊功舎という牧場に勤める。

明治二十二年（一八八九）茅場町に「乳牛改良社」を開業。結婚。

この年、大日本帝国憲法公布。

明治三十三年（一九〇〇）、初めて子規庵を訪問、入門する。この年、「明星」創刊。

明治三十五年（一九〇二）、子規の病状悪化、看護の輪番制を設ける。九月、子規死去。この年、日英同盟調印。

明治三十六年（一九〇三）、根岸短歌会の機関誌「馬酔木」創刊。

明治三十七年（一九〇四）、日露戦争始まる。

明治三十九年（一九〇六）、「野菊之墓」が「ホトトギス」に載る。

明治四十年（一九〇七）、森鷗外の観潮楼歌会に出席。

明治四十一年（一九〇八）、「阿羅々木」を創刊。「明星」終刊。

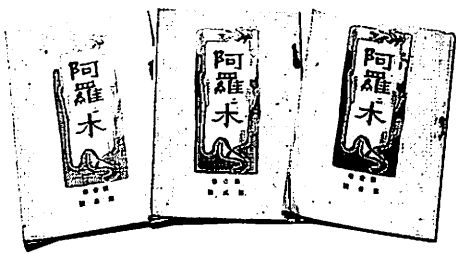
大正二年（一九一三）、脳溢血で死去。享年満四十八歳。

第二章 歌と時代

牛飼が歌詠む時に世の中のあらたしき歌大いに起る

明治三十三年の歌。雄渾である。それ以前に作られた歌だという説もあるが、やはり「恐らく左千夫が子規を訪うてから間もない頃のものとおもふ（斎藤茂吉）」という物語の中で読みたい。

牛乳を飲む習慣は、文明開化の風潮とともに広まった。左千夫は、やや後発であったが、乳業家という明治の魅力ある事業主の一人だった。時代に生き、それを担う人間が詠むときに、新しい歌が起るのだと高らかに宣言した。歌う主体の問題を語っているのである。子規は「和歌は長く上等社会にのみ行はれたるがために腐敗し、俳句はとかく下等社会に行はれやすかりしたため腐敗せり。われらは和歌俳句の堂上に行はるるを望まず、和歌俳句の俗間にて作らるるを望まず。和歌俳句は長く



「アララギ」創刊号他

文学者の間に作られん事を望むなり」(「人々に答ふ」と主張した。左千夫は、子規の和歌革新を継承し、さらに文学者イコール社会生活者というところまで進めたのである。その思想を生き方の問題として体現したのだといえる。

ゆかの上水こえたれば夜もすがら屋根のうらへにこほろぎの鳴く

ものはこぶ人の入りくる水の音の室にとよみて闇響すも

闇ながら夜はふけにつゝ水の上にたすけ呼ぶこゑ牛叫ぶこゑ

本所茅場町(現・東京都中央区)に居住した左千夫は、繰り返し現実に遭遇した水害を歌った。それぞれ、明治三十三年、四十年、四十三年の作品。一首めは、床上浸水に見舞われて人も牛も避難させた後、独り左千夫が夜を守るの図である。こおろぎも難を逃れて、屋根裏で鳴く。しんと水が満ちている家で、独りこおろぎの声を聞く。無気味なりアリエーと優しげなポエジーが融合した佳品。現実の苦難のなかにも、まだ詩的な情緒を求める姿勢があったといえる。三首めは「水害の疲れ」一連のもの。「牛叫ぶこゑ」が悲痛である。左千夫は打ちのめされた。水害というテーマの社会性、描写の臨場感。いずれも子規の写生という範疇を超えている。現代に通じるリアリズムであるといえよう。

焼太刀の鋭刃のさやけき名に負へる日の本つ国民こぞり
たつ

子規入門以降となるとやはり日露戦争が最大の出来事となろう。近代国家日本の総決算である。愛すべき楽道家たちが、輝く白い雲を見つめて坂をのぼりつめたところの大戦だった。無論、それは嘘である。前線の兵士に楽道家などいるはずもない。出征軍人九四万五千人。戦闘死者六万人、戦病死者二万人というのが残された冷厳な数字だ。開戦は明治三十七年二月。左千夫も多く日露戦争の歌を詠んだ。引用歌を含む左千夫の開戦の歌十三首は、新聞・雑誌に発表されたものではない。二月の根岸の互選歌会で詠まれたもの。五人集り、八十六首詠んだという。興奮が伝わってくるようだ。こういうごりごりのナシヨナリズムの歌が、公的なプロパガンダの場ではないところに存在した点に注目したい。

起臥の朝戸夕戸に声立て、吾悲しみを知るかこほろぎ

戦死軍人の妻女になりかわって詠んだ歌。哀切というべきだろうか。明治三十七年十月の歌会の作品で、実は「出征軍人の家族にかはり」という題詠なのである。歌題は、ほかに「枝豆」「草花」「冬枯」。枝豆と出征軍人家族の哀情が併置されているのが、現代の感覚からすると奇妙である。大真面目に違いないのだが、どこまで本気なのかよく分からない。ともあれ左千夫らしい隣人愛の精神は滲んでいるといえる。

今朝のあさの露ひやびやと秋草や総べて幽けき寂滅の光

大正元年、晩年の絶唱。感動した茂吉は、左千夫宅を訪れたとい

う。アララギ内部論争で断絶していた師弟の有りようを思えば、感動的な逸話である。茂吉は「或期間から深く宗教にも参じた左千夫が、遂に一草一木にもその生の寂寥を観得するに至つた」「左千夫生涯の晴明さから、ずいぶん遠いところに来た。「露ひやびや」と秋草や」の語感に注目したい。包み込むような柔らかさが支配した直後に、深い断絶が来る。この切れが、上句の描写と下句の象徴性を統合している。門人との対立、愛人との離別による孤独と寂寥。信仰の深まり。人生的境地が歌境の深化をもたらしという近代短歌の典型である。

第三章

短歌史におけるポジション

左千夫は、子規を発展的に継承し、茂吉・赤彦の時代に繋がたと

いうのが常識的な見解であろう。

左千夫の子規批判「子規子の研究的態度は文学は只文学を目的とし、歌は只歌を目的と為せしと云へる見地に立たるものと見るべく、従つて其作物の跡に就て見るも、自然を親み人生を傍観せるの趣きあり、歌と他一切の文学美術との関係若くは宗教問題社会問題人生問題等の諸問題と文

本所茅場町の牛舎

学との関係に就ては、殆ど意を注ぐ所なかりしなり」(「馬酔木」終刊之消息 明治四十一年)を裏返せば、それがそのまま彼のスタンスになる。歌は、一切の文学・美術・宗教問題・社会問題・人生問題と関わるべきなのである。この器が左千夫の魅力だ。歌人は、現実社会の一員であるという態度が、左千夫を貫いたのである。短歌のリアリズムに社会性をもたらしした功績は大きい。

子規は、理念としての二〇世紀短歌の源流に違いない。短歌における言語は、子規の敷いたレールの上を走り続けている。しかし、生き方を含めた全存在としては、左千夫こそが現代に通じる歌人像の原型ではないだろうか。歌人は、現実に職業を持ち、社会に参加しながら歌をつくる。当たり前のことだ。が、この現在の視点からすれば平凡きわまりない姿こそが、二〇世紀の歌人の有りようなのである。牛飼が歌よむ——われわれは、現代に生きる様々な牛飼の一人として歌人であるのだ。左千夫は、職業を通じて社会に生きる人間が作歌の主体であるという二〇世紀の歌人のプロトタイプであった。

(かとう・じろう 「未来」編集委員)

引用歌は『左千夫全集』(岩波77刊)による。漢字は新字に。



晩年の左千夫(前列中央)。斎藤茂吉(後列左から2人目)、土屋文明(後列右端)らとともに(明治44年)